談話室

わが大学の思い出—室蘭工業大学—

山下良一*

室蘭と言えば，古くから鉄鋼の町として栄えてきており，製鉄所や製鋼所があることは一般に知られていることと思うが，いざその場所と言えばほとんど知られていない．特に内地（北海道では本州のことを内地と呼んでいる．）の人々には，馴染みのない町のことと思う．暇な時に地図を広げて北海道を見ていただきたいのだが，札幌市から室蘭本線に乗つて約2時間，終着駅が室蘭市である．途中，千歳市や苫小牧市を通り太平洋を真近に眺めることができる．さらにアイヌ部落やサラブレッドの馬牧場等の町並の牧歌的風景が続いて室蘭市に至る．

我が母校である室蘭工業大学は，この室蘭市から，バスで約1時間，もう隣町（熊牧場と温泉で有名な登別）との境界に近い山奥の盆地にある．木造と鉄筋の校舎が10棟余り混在しているのが，我が大学のキャンパスである．母校の前身は，明治20年頃北大付属土木専門部の土木工学科と言われている．その後，高等工業・工業専門学校を経て，現在の室蘭工業大学となつたと聞いている．

学生時代，私はキャンパスの近くで4年間の下宿生活を過ごしたが，天気の悪い日には学生寮の中をよく通つて，講義を聞きに行つたものだつた．どこの大学でも学生寮は古い建物が多いが，我が大学の寮，明徳寮もその例外ではなかつた．木造二階建ての寮は，一階でも雨漏りが激しいうえに，廊下は，所々床板がなく，床下の草が顔を出していた．教養時代，基礎学科の講義はもつぱら，古い木造校舎と，比較的新しいれんが作りの校舎で行われてきた．この教養時代の講義で今だに思い出すでき事がある．それは物理の講義で，テーマが振動についてだつた．講義が始まつて約30分程して，教授が振動の実験をやろうと話した時，教室の螢光灯や，窓の外の立木が小刻みに揺れ出したかと思うと，「ドーン」と下から突きあげるような大きな音と共に，教室全体が大揺れに揺れ出し，あわてて教室から飛び出したり，机の下に潜り込む者，腰が抜けたのか茫然として座つている者など，皆さまざまな行動をとり，ちよつとしたパニック状態となつた．揺れは1分にも満たなかつたようにも，10分以上も続いていたようにも感じた．おさまつてから，「振動実験やりすぎたかな？」との教授の第一声に，学生一同大爆笑したことがあつた．この講義は打ち切りになつてしまつたが，友人と，「寮が潰れているのでは？」と話をしながら帰つたことがある．翌日の朝刊に，地震の被害写真が載つていた．それは，鉄筋の三階建ての建物が潰れた写真だつた．室蘭では，ほとんど被害がなく，もちろん，我が大学では古い木造校舎や寮も無事であつた．

専門課程にはいつて，金属工学に関する講義が始まつた．金属組織学・材料学・金属加工学・金属化学・鉄鋼製錬等それまで聞いたことのない内容ばかりでとまどつた．が，しだいに興味を覚え，特に金属組織学の実験では，試験片を目の粗いサンドペーパーから始め，細かいサンドペーパーを用いた後，バフ研磨で鏡のような面に仕上げ，種々の腐食液で腐食させて顕微鏡をのぞき込んで組織を見た時，デンドライト，パーライト，セメンタイト等の姿が目の前に広がり，その自然のなす美しさにしばし我を忘れた事があつた．また，電子顕微鏡を使つての実習の時には，苦労して作つたレプリカで，電顕にかけ写真を取りネガを焼き付けして浮びあがつてくる像を見て，そのすばらしさに引かれた記憶がある．はじめて見た鉄の表面の写真は私の学生時代の宝物の1つとして，今も大切にしまつている．

室蘭工業大学は，他の大学に比較して学生数が少なく小じんまりとした面があり，教授や助手の方とは家族的なつきあいが多く，教授の家へおしかけて夕食を御馳走になり夜おそくまで，討議をしたり，助手の方と町へ飲みに出かけたりした．今にして思えばいやな顔も見せずに我々学生の世話をしていただいたことに感謝している．

最後になつたが，金属工学科の教授方は，いろいろな特技を持つておられる方が多いが，中でも田中教授は，詩を詠まれており，我が母校の校歌の作詞をされている．その一部をここに紹介して，私の大学時代の思い出話の筆を置くことにしたい．

朝蘭岳の　　秀に映ゆる
茜のいろの　　かぎろいに
父祖の拓きし　土薫る
友よ　謳はむ　声たかく
今あらたなる　建設の
鎚の音ひびく　代の来る

* 住友金属工業(株)和歌山製鉄所